

『滴天髓』

通神論の「震兌」「坎離」

『滴天髓』は、一三〇〇年代の元代末から明代初期に活躍した劉基（劉伯温）によって著わされた書といわれていますが、著者が実際に劉基であったかどうかは文献考証的に定かではありません。

ここに掲げた『滴天髓』の原文は、一九三三年（癸酉年）に袁樹珊により撰輯され、袁紹珊により校刊された『滴天髓闡微』を元にしてあります。また『滴天髓闡微』自体は、一八〇〇年頃、任鐵樵によって著わされた『滴天髓』の評註です。

なお、『滴天髓闡微』には、「衰旺」「中和」「源流」「通関」「干支總論」「何知章」「體用」などの小見出しがつけられています。これらはおそらく『滴天髓』の原文にはなかったもので、任鐵樵氏が袁樹珊氏のいづれかにより追記されたものではないかと思われる。

また、以下拙解において「原文」と表記してあるものは、『滴天髓』の元の文を指し、「原註」とあるのは、劉基による評註とされているものであり、「任註」は、任鐵樵による評註です。

原文の下にある通し番号は、『滴天髓闡微』における原文の掲載順に対応しています。

《》内は原文の読み下しで、内は和訳。解説中の「」内は、漢文の引用、または意識です。

震兌

震兌主仁義之眞機。勢不兩立。而有相成者存。 68

《震兌は仁義の眞の機を主る。勢いは兩立せず。しかして相成るを有ち、これ存す。》

震 シン … 名詞 周易の八卦のひとつ。東方のことで、五行は木。

兌 タイ・ダ … 名詞 周易の八卦のひとつ。西方のことで、五行は金。

仁 ジン … 名詞・形容詞 自分と同じ仲間として、すべての人と接する。隣人愛や同情の気持ち。またそうした心をそなえた人。仁は五常のひとつで、五行の木に配されている。四柱八字中の木は、その人の仁の心に関連しているという考え方があ。

義 ギ … 名詞・形容詞 よい。利欲に引かれず、筋道を立てる心。義は五常のひとつで、五行の金に配されている。

機 キ … 名詞 ものごとの細かい仕組み。からくり。ノぎざし。事がおこる細かいかみ合い。

存 ソン … 動詞 ある。…にある。…にいる。ノたもつ。じつとどめておく。大切にとっておく。

奸 カン … 形容詞・名詞 よこしま。道理をおかしている。悪事。またその悪事をおかした人。

充 キ … 名詞 曲がって正しくないこと。

禦ギヨ … 動詞 ふせぐ。じゃまをして通さない。逆らって抵抗する。而已ののみ。文末に付けて限定の意をあらわすことば。それだけ。そののみ。

【解説】

震兌しんたは東方・木と西方・金のことです。周易における方位の表現を借用して、間接的に五行を表現しているのです。木と金それぞれに、五常の仁と義が配当されていることから、震兌は仁義の眞まことの機つかひを主なるといわれています。そして木と金は剋くになり、五行として相対あいたいすることになりますから、勢せいは兩立りゅうたつせず。とあるのですが、剋くにより、一方的に木が損傷しんじょうを被ひるだけで終わるのではなく、木も金もその作用を保ち、勢せいではない部分で相成あひなることがあるとし、これ存ぞんす。といわれているのです。つまり、仁も義もその作用を発揮し得るといふことです。この論理は次の「坎離かんり」においても同様です。

しかし、剋くという作用について、通常、喧嘩けんかや戦たたかいといった譬たとえによる説明に終始してきますので、勢せいは兩立りゅうたつせず。は理解できたとしても、その後、相成あひなるといわれても、ただただ途方に暮れるのみでしょう。

五常とは、仁じん・義ぎ・礼れい・智ち・信しんの五のことで、「人が常に守るべき五つの徳目」とされています。「徳目」とは、道德の項目のことです。そしてそれぞれ、木・金・火・水・土に配され、四柱八字中の五行から、その人の五常のあり方を推察できるとされているのです。

しかしながら、五常は徳目であるとされているため、例えば八字に木がありさえすれば、その人には生まれながらにして「仁」の心が備わっていて、惻隱そくいんの情があり、思いやりがあり、心優しい人であるとか、良好な面のみ偏った、一面的に過ぎる解釈しかされていないのです。もちろんこうした解釈は実証的に全く役に立ちません。四柱八字中に木があれば皆、心優しい善人ばかり、などといったことは、あつはずもなことです。

このように、単独の五常の理解においてさえ問題含みなのですから、仁と義の相関関係を正しく理解することなどできるはずもないのです。しかし『滴天髓』の原文には、相関関係があり、相成あひなるといわれているのです。つまり、木と金が剋くになることにより、仁と義が、単独の作用とは異なる状態に生成発展し、新たな事象を形成するということです。

この問題については、拙著に詳しく解決策を提示してあります。ウェブサイトの「独自の看法について その2」にも、その抜粋を公開してありますので参照してください。

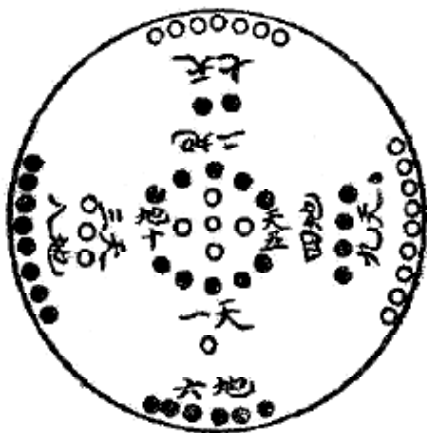
ただし、古来より仁・義についていわれてきた意味を踏襲するだけでは、この原文は理解できません。原文にはひと言も触れられていない、仁・義の本質的な作用を抽出する必要がある。それさえすれば、実証的に有効な理解の方法があります。ただ、『滴天髓』の作者と拙著で公表している考え方に、どれほどの共通性があるのかどうかは知るよりもありません。

さて以下、原註、任註にはどのようにいわれているのかを見てゆくことにします。

原註では、いきなり「内外」という初見の考え方が提示されています。そしてそれをもとに、震と兌の相関関係を次のように説明しています。

震在內。兌在外。月卯日亥或末。年丑或巳時酉是也。主之所喜者在震。以兌爲敵國。必用

龍馬載河圖



伏羲時龍馬載圖。出於孟河。其書九篇。
 天一三五七九。地二四六八十。天數
 五。地數五。五位相得。而各有合。天數
 二十有五。地數三十。天地之數。五十
 有五。

火攻。主之所喜者在兌。以震爲奸宄。備禦之而已。不必盡去。不必興兵也。

《震が内に在り、兌が外にある。月が卯で、日が亥あるいは未。年が丑、あるいは巳で、時が酉、これなり。主の喜ぶところが震にあるなれば、兌をもって敵国となす。必ず火を用い攻める。主の喜ぶところが兌にあるなれば、震をもって奸宄となす。これを禦ぎ備えるのみ。必ずしも盡く去らさず。必ずしも兵を興さず。》

原註のいう内は、四柱八字の月と日のことであり、外とは、年と時のことのようにです。確かに、年月日時と並べれば、年と時は四柱八字の外側にあるように見えますが、こうした視点はいかがなものでしょう。四柱八字を二つに分けるなら、干支暦の成り立ちからして、年月と日時でなければなりません。この理由については、拙著をご覧ください。

またさらに、震に亥卯未木局を、そして兌に巳酉丑金局を関連させて説明している点も、救いようのないほど拙い内容です。この最初の一節を見ただけで、原註は全く原文の評註としての体をなしていないことは明かであると言えます。

原註は右文に続けて、その四倍ほどの字数を費やし解説しているのですが、ここに紙数を割いてまで採り上げる価値を見出すことができないので、すべて省略します。興味のある方は、『滴天髓』の原書を手に入れてください。

さて任註には、どのようにいわれているでしょうか。

震陽也。先天之位在八白。陰固陰而陽亦陰矣。兌陰也。先天之位在四緑。陽固陽而陰亦陽矣。

《震は陽なり。先天の位は八白に在り。陰は固より陰、しかして陽また陰や。兌は陰なり。先天の位は四緑に在り。陽は固より陽、しかして陰また陽や。》

「震」「兌」は周易から引いた記述ですが、これはただ単に東方と西方を指すためだけの表現であると考えます。周易が成立した後、四柱推命の体系が確立するまで一〇〇〇年以上の年月が経過しています。根っこがつかないことは否定はしませんが、周易と四柱推命は全く別ものと理解すべきです。それにもかかわらず、任註では周易が成立する以前の伝説的時代から伝えられている「河圖洛書」から、「八白」「四緑」などを引き合いに出しているのです。その見識を疑います。

次は『星平會海全書』に掲載されている「河圖洛書」の図の一例です。

なお「河圖洛書」にも諸説ありますが、右図のように、「天一三五七九。地二四六八十。」とし、「八白」は東方の地数、「四緑」は西方の地数とされているものもありますので、任氏はこうした旧説を正しく踏まえているとは言えます。また図中下段の文中にある「伏羲」とは、中国古代の伝説上の帝王の名です。

さて任氏は『滴天髓』原文を理解することができなかったため、苦し紛れに周易に関する知識を羅列したのではないかとさえ思えてきます。いずれにしても任註の内容は、原文とは全くかけ離れたものであることは間違いないと言えます。

ちなみに「八白」「四緑」は現在日本でも、九星術、気学、そして中国の原典とは全く内容が異なる日本独自の風水と称するもので使用されていますが、四柱推命には無関係です。そもそも四柱推命で用いる十二支は十二方位に配当されていますが、周易等では八卦をもとにしていますので八方位です。

そして任註は次のように論を続けています。

震爲長男。雷從地起。一陽生坤之初。兌爲少女。山澤通氣。故三陰生於乾之終。長男配少女。天地生成之妙用。

右のような論を見せられると、任註を先に読み進める気さえ萎えてしまいます。任註はこれ以上採り上げても無意味なようですので、以下省略することにします。なお、任註ではこのあと五つの四柱八字が掲げられ、持論に都合のいい解説がなされています。任註からわかることは、勢いは兩立せず。しかして相成ると原文にいわれていることを全く理解できなかったであろう、ということなのです。

坎離

坎離宰天地之中氣。成不獨成。而有相持者在。⁶⁹

《坎離は天地の中氣を宰る。成るは獨り成らず。しかして相持つを有ち、これ在る。》

坎 カン … 名詞 周易の八卦のひとつ。北方のことで、五行は水。

離 リ … 名詞 周易の八卦のひとつ。南方のことで、五行は火。

宰 サイ … 動詞 つかさどる。主任者として仕事をあずかる。

獨 独 ドク … 副詞 ひとり。それだけ。「獨成」は、他から拘束されず自由に成し遂げること。

【解説】

原文の表現は「震兌」と変えてありますが、全く同じ主旨・内容であるといってもいいと思います。

原註には次のようにいわれています。

天干透壬癸。地支屬離者。乃爲既濟。要天氣下降。天干透丙丁。地支屬坎者。乃爲未濟。要地氣上升。

《天干は壬癸を透き、地支は離に屬するは、すなわち既済となし、天氣が下降するを要す。天干は丙丁を透き、地支は坎に屬するは、すなわち未済となし、地氣が上 升するを要す。》

原文では、「坎離」の相関関係の問題を、一般論として採り上げているにもかかわらず、原註では、天干と地支に限定して、水、あるいは火がある場合について論じています。なおこの原註を理解するには、陰陽五行論に「天の氣下降し、地の氣上昇する」という考え方があっても知っておく必要があるでしょう。

そして 既済（既済）と 未済（未済）は、周易の六十四卦です。ちなみに前者は「離下坎上：ものがすすむこと」とのこと、後者は「坎下離上：ものごとのまだ成らないさま」を指しますが、原文には 成るは獨り成らず。とありますから、後者の水と火が揃っても成らないさまを示す 未済 を採り上げるのは、無意味ではないかと思えます。そもそも『滴天髓』の著者は、周易の用語を借用はしても、周易と四柱推命に密接な関連を持たせることを意図しているとは思えません。にもかかわらず、原註の著者はそのことに気がつかないまま、論を進めているのです。

このようにこの原註も採り上げるほどの内容はないので、以下省略します。

さて任註にはどのようにいわれているかですが、「震兌」の註の延長でしょうから、あまり期待ができないこととなります。

坎陽也。先天位右七之數。故爲陽也。離陰也。先天位左三之數。故爲陰也。

《坎は陽なり。先天の位は右七の數。ゆえに陽となすなり。離は陰なり。先天の位は左三の數。ゆえに陰となすなり。》

次図も『星平會海全書』に掲載されている「河圖洛書」の一例です。この図によれば、任註に 右七の數 左三の數 とある点については一目瞭然です。しかし、先天の位とは何のことかですが、右七の數 は西方・金ですから、坎の水を生じ、左三の數 は東方・木ですから、離・火を生じることになります。「先天」とは、生まれながらに身に備わっている、という意味としても、こつした用法はいかなものかと思えます。



神禹時。靈龜負書。出於洛水。其中六篇。洛書蓋取龜象。故其數戴九履一。左三右七。二四爲肩。六八爲足。五居中。中者土。火之子。金之母。寄坤也。

既述もしましたが、四柱推命の理を解説するために、「河圖洛書」を持ち出して無意味

で、任註が『滴天髓』原文の意図するところとはかけ離れた内容でしかないのは明白です。よって採り上げる価値が見出せないため、以下の任註は省略します。ちなみにこの後任註では五つの実例が挙げられています。結局、原註も任註も、評註の体をなしていないため、原文を理解するのに全く役に立ちませんでした。

さて『滴天髓』の原文には、「震兌」「坎離」という周易より借用した表現を通して、木金、水火の剋は衝突するだけでなく、相成る 相持つ という発展的な相関関係が存在し得るといわれていました。しかし、実証的にはこの二つの視点だけでは不完全です。『滴天髓』の著者は、東西、南北という方位の視点にとらわれ過ぎたためか、火金というもう一つの剋を見逃しているのです。火金の剋が生成発展すると、物事に筋を通すことを好み、時に理屈っぽく、また論理的であったりするという、事象に関わることになるのです。

木金、水火、そして火金の剋における 相成る 相持つ という相関関係を、すべて正しく理解することにより、五常という概念は、四柱推命において、はじめて実証的に必須の要素となります。

最終更新：09・06・15